

令和5年3月17日

令和4年度 特別の教育課程の実施状況等について

都・道・府・ 県		
学 校 名	管理機関名	設置者の別
三木市立緑が丘東小学校	三木市教育委員会	国・ 公 ・私

1. 特別の教育課程の内容

(1) 特別の教育課程の概要

小学校第1・2学年の「生活科」6時間を削減して、「外国語活動」に充てる。

(2) 学校又は地域の特色を生かした特別の教育課程を編成して教育を実施する必要性

三木市においては、次代を担う子どもたちに、ふるさとの歴史や文化、とりわけ伝統産業である三木金物の素晴らしさを伝え、我がまち三木市を愛する豊かな心を育むとともに、ものづくりを通じて自ら考え、生きる力を育成してきた。これまで取り組んできた「ふるさと教育」や「心の教育」を基盤として、今後のグローバル化に対応できる子どもたちを育むため、小学校低学年から「聞く」「話す」体験を中心とした「外国語活動」に取り組む。

(3) 特別の教育課程に基づく教育の実施状況

ア 実施体制

担任とALTのチームティーチングによる「外国語活動」を、学期に2回ずつ年6回行っている。また、各学年の学習内容を考慮し、市で統一した外国語活動の年間カリキュラムモデル例をもとに、系統的な外国語活動となるよう学習カリキュラム等を立案する。各校の外国語担当者で組織する外国語研修部会は、研究授業や実践事例に関する協議などを通して、各校の取組を交流し市内全体で交流するとともに、検証しながらよりよいものとする取組を進めている。

イ 指導計画及び授業の内容

第1・2学年では英語にふれながら表現を楽しむことをめざす。ALTや友達と簡単な英語で気持ちの良いあいさつをしたり、ゲームをしたり歌を歌ったりするなどの活動において、「話す」「聞く」ことから単語を習得したりする。また、色や形、動物等簡単な英単語を知ることによって他の単語についても学びたいというように児童の興味関心を高めることに努めている。

特に低学年という発達段階を考慮し、授業だけでなく、休み時間や給食の時間、清掃時間などにALTとともに時間を過ごすことで、英語を身近に感じることができるよう工夫している。

(4) 情報提供の状況

外国語活動の様子については、学級・学年通信やホームページなどで保護者に知らせている。

(5) 特例の適用開始日及び、取組の期間

- ・ 特例の適用開始日 : 平成 28 年 4 月 1 日
- ・ 変更した特例の適用開始日 : 令和 2 年 4 月 1 日
- ・ 取組の終期 : 令和 5 年 3 月 31 日

2. 特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

(1) 特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

- 計画通り実施できている
- ・ 一部、計画通り実施できていない
- ・ ほとんど計画通り実施できていない

(2) 保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

- 実施している
- ・ 実施していない

3. 実施の効果及び課題

(1) 特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している学校の教育目標との関係

本校は、「心豊かに たくましく 未来をひらく子の育成」を学校教育目標とする。これからの国際社会を生きる児童が豊かな未来を共に拓こうとする子として成長していくためには、言語や文化について体験的に理解を深め、外国語の音声や基本的な表現になれ親しませ、積極的にコミュニケーションを図ろうとする基礎的な技能や態度を養うことが必要である。そこで、特別の教育課程を編成・実施し、教員とALTとの指導体制を充実させ、1年生から年間カリキュラムを作成して、外国語によるコミュニケーション体験を積み重ね、そのコミュニケーション能力の素地を養うことが大切であると考える。

(2) 実施の効果

小学校という発達段階は、新しい言語を急速に吸収することができる年代である。そうした年代において、歌やゲーム等で英語を発話したり聞いたりすることによって、自然な発音やアクセントの練習を早い段階から行うことができた。また、英語でのあいさつや簡単な表現にチャレンジするために、「話す」「聞く」体験により簡単な単語を身に

付けることで、英語への抵抗感を小さくすることができた。ALT のネイティブな英語に触れることにより、英語特有の発音を聞き取る機会を早い段階から設定することができた。さらに、ALT の母国のスポーツや食べ物といった文化や他国の自然環境等についてまで興味関心を高めることができた。担任も ALT と協力して外国語活動を進めることで、教材の効果的な使用方法や、歌やゲームの指導方法、キーワードの使い方を工夫するなど、外国語活動の指導力が高まった。

4. 課題の改善のための取組の方向性

授業プログラムやカリキュラムなどの指導内容、指導方法と共に、指導と評価の一体化を目指し、評価方法についても研究する必要がある。本教育課程の目標が、英語にふれながら表現を楽しむことにあることから、学習に取り組もうとする態度を評価する場面が多くなる。その考え方や具体的に見取る方法などを研究し、第3学年以上の外国語活動、外国語に繋がる評価となるよう取り組むことが大切である。こうした授業プログラムやカリキュラムを実践する教職員の指導力向上、評価に関する研究などをテーマとし、教職員研修の充実を図りたい。

本年度をもって、特別の教育課程を編成ならびに実施は、終了となるが、来年度以降の低学年については、「国際理解教育」の一環として、生活科等の教科を中心に実施を検討していく方向である。